

流出と突破 そして エアアイグニスとエントアイグニス ——名のない神にこだまを返す——

後藤 嘉也

二種の思考

ハイデガーによれば思考には二種がある。①存在者を対象として表象し (*vorstellen*)、人的物的資源 (*Bestand*) として用立てる (*bestellen*) 近現代の計算する思考。そこでは存在者はありのままのものとしては存在しない。ゲシュテル (総かり立て体制) の時代に、もの (エックハルトでは人を含む) はものとならない。②存在する一切のなかで統べる意味を熟慮する省察する熟考。存在の明るむ場に入る (*sich einlassen*) こと、放下 (*Gelassenheit*) である。

第一の存在者か、語られえないものか

ヴェルテはトマスを形而上学克服の限界に位置づけた。トマスの神は、第一の存在者、実体であるかぎり、存在者から見られた存在、存在者の述語、存在者性だが、「どんな類 (言明様式) にもない」かぎり、存在者ではなく語られえない。

だがハイデガーにとって、トマスの神は第一の存在者という形而上学の神であり、これに対して、「神には存在は帰属せず、神は存在者ではなく存在者よりも高次の何かである」エックハルトの神こそ、名をもたず人間の語れない神である。

なぜの問いとなぜなしに

二人の中世哲学者に対するハイデガーの姿勢は、なぜの問いからなぜなしにへの移行と重なる。1920年代末以降、彼において「なぜ、そもそも存在者が存在しむしろ無があるのではないか」という問いは、存在者が存在する根拠に近づく根源的な問いだった。

ところがそれは、30年代末から、説明するなぜの問い、(トマスのように) あらゆる存在者の第一原因を尋ねる非根源的な問いになる。エックハルトの真の神は根底なき深淵であり、神も人間も、なぜ (根拠、理由、目的) なしに存在し働く。ハイデガーでも、存在は根拠なき深淵であり、人間もなぜなしに存在するときその深淵、存在の明るむ場に立つ。

放下する突破 そして エアアイグニスのなかへの放下

神という第一の存在者、実体をもってなぜの問いに答えず、なぜなしに生きるあり方は、まず、この世とその存在者を、あらゆる偶像——技術的对象も——を放下し放つ。次に、エックハルトは、神性の無へ、神の根底にして魂の根底である根底なき深淵へ自らを放下して突破し、ハイデガーは、存在のヴェールである死の無へ、エアアイグニス (存在の明るむ場)

という根拠なき深淵のなかへ自らを放下し放つ。

放下する突破は神と人間に固有性 (eigen) をもたらし、エアアイグニスのなかへの放下は存在と人間が固有性を獲得する出来事 (Er-*eignis*) につながる。

流出に応じる突破 そして エアアイグニスに答えるエントアイグニス

ところで、突破は流出に応じるこだまであり、エアアイグニスのなかへの放下は存在ないしエアアイグニスの呼びかけに答えるという意味でのエントアイグニスである。

突破という語は勇ましいが、エックハルトの突破は主体的意志のたまものではなく、神の流出 (子, *wort* を生む) への呼応 (子を生み返す) である。同じく、エアアイグニスのなかへに放下する思考は、存在の呼びかけ (*Wort*) にこだまを返すエントアイグニス (*Gegenwort*) である。根拠も理由もなくなぜなしに。

しかも、神と魂、存在と思考、呼びかけと応答のあいだにずれは避けられない。天変地異も殺人もあるこの世界をしばし存在している人間が根底へと突破して神性との一にとどまり永遠の今を寿ぐことは、生み出された他の存在者の存在の忘却である。一はつねにすでに多である。

神が私のなかへ独り子 (*wort*) を生む ⇨ 私が神のなかへ独り子 (*wort*) を生み返す

神が流出する ⇨ 魂が突破する

人間が放下のなかへ *einlassen* される ⇨ 人間が放下のなかへ自らを *einlassen* する

エアアイグニスが生起する ⇨ エントアイグニスに答える

「ヤッホー」と叫ぶ (*Wort*) ⇨ 「ヤッホー」と返す (*Gegenwort*)

名のない神にこだまを返す

魂の突破は神性の根底へ、放下するエントアイグニスはエアアイグニス (存在の真理) へ向かい、しかも、世界とものを放下するだけでなく、世界とものへ反転する。

突破、そして、エントアイグニスは、知られえない神、そして、神々しいものたちに向かって自らを静かに放つ。名のないその神や神々しいものたちはものとなる。エックハルトにとってすべてのものは神である。ハイデガーにおいて、エントアイグニスによって、天地のあいだで死すべき人々と神々しいものたちが鏡に映し合うとき、世界が四方界として世界となり、ものがものとなる。人間とものは神々しいものたちの光をかすかに反射し、神々しさをおびる。

世界を離脱する神性への突破、そして、エアアイグニスへのエントアイグニスは、世界と存在者へ反転し、神々しさをおびた語りえないものの呼びかけにこだまを返す。用立てられる人的物的資源でしかありえないものがあるままのもののであるようにする (*seinlassen*)。この世かあの世で報いられることを望まず、理由も目的もなく、ただ呼びかけられたから答えるという仕方、ずれながら。